

所属・資格 史学科・教授

申請者氏名 中村 順昭

研究課題		奈良・平安時代政治史の研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	8～9世紀の政治史については、従来の研究は中央政界の動向を中心に行われている。その一方で、地方官衙や地方官人に関する研究が進展しており、中央と地方の両方を視野に入れて政治史を再検討する必要がある。たとえば武蔵国を本貫としながら上級貴族となった高麗福信のような例がある。吉備真備や和気清麻呂なども地方出身の貴族で、このような事例は8世紀後半から多くなる。このような地方出身の貴族官人にも焦点をあてて、地方政治に関する政策の変化などを考慮しながら、中央政府のあり方を考える。
	研究の結果	8世紀前半には、国司制度の整備によって地方豪族らに対する国司の統制力が強まった。郡司となるような伝統的豪族以外の中小豪族も国司との関わりの中で行政に参画し、国司を介して中央署勢力と結びつくことが多くなっていった。藤原武智麻呂政権と橘諸兄政権での現実容認的な動向の中で、この傾向は強まって、新興勢力である藤原氏・橘氏やそれに支えられた天皇の専制的な権力が強まった。しかし、天皇の専制が頂点に達した藤原仲麻呂政権・道鏡政権において天皇とその周辺での対立激化を生み出すことになった。また墾田永年私財法を契機とする墾田所有公認によって、地方諸勢力と中央貴族との新たな結びつきが強まることとなり、国司として赴任した中央官人が地方に土着する動きが生まれることとなった。
	研究の考察・反省	8世紀の政治史を考える上で、遷都の問題は重要な課題として残されている。今回の研究で聖武天皇、橘諸兄政権による恭仁宮、難波宮、紫香楽宮の問題は取り上げたが、その後の藤原仲麻呂政権の保良宮、道鏡政権の由義宮については、従来の研究も乏しく十分に上げることができなかった。保良宮・由義宮は、一時的な行幸としてでなく、新都として位置づけてその政治史的な意義を追究する必要があるだろう。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 著書（単著）『橘諸兄』（2019年刊行予定、吉川弘文館）
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	